

越冬中のカモが引き起こす農業被害の実態解明

日本野鳥の会茨城県会長 池野進

日本の首都・東京から北東 70km に茨城県がある。広い関東平野の河口にあるので、たくさんの湖や沼がある。そこにロシア生まれのハクチョウや様々なカモ類が越冬し、その数は毎冬 10 万羽を超える。カモ類が越冬する茨城県内の湖のうち、日本で二番目に大きな霞ヶ浦で越冬するハクチョウやカモ類は茨城県の半分以上を占める。代表的なカモは、マガモ、ヒドリガモ、コガモ、カルガモ、オナガガモなど昼間水面や湖岸の植物帯で休み、夜間上陸して地表の植物質を食べる習性を持つカモが占めている。今から 50 年前までは、キンクロハジロやカワアイサなど潜水性のカモも多かった。しかし、水需要が多い東京に近く、水道水や工業用水にするため湖の出口を大きな堰でせき止め、汽水湖が淡水湖になった。この影響で魚介類の種構成が大きく変化し、量も激減したため、潜水性のカモはいなくなった。

大きなダム湖に変わり、陸の地下水位も上昇した。ダム湖になる前の湖岸は、コメを作る水田だったが、地下水位で、コメ作りには適さなくなり、収入源をコメより価格が高いレンコン栽培に切り替えられ、今では日本のレンコン生産量の半分以上を占めるようになった。

レンコンは、ハスの地下茎の食材名である。ハスはインド原産の水生植物で、コメと同じく泥深い土質を好む。ピンク色の大きな花は観賞用に世界中で、水底から伸びた長い茎は繊維として東南アジアで、水底深くで長く伸びた地下茎は、レンコンとして中国や日本で食用にされ、日本では新年を迎える大切な食材である。



レンコンの収穫期と越冬するカモの数が最大になる時期が重なり、夜になるとカモはハス田でも餌を採るので、それをみた農民は、レンコンを食べていると思い、防鳥網をハス田の上に張ってレンコンを守る。網の目は粗く、ハス田と平行に浮かして張られるので、カモは簡単にハス田の中に入れる。餌探し中、不意に人間などに驚いて飛ぼうとすると、首など先の尖った部位を防鳥網にからめ、脱出できずに死ぬ。その数は、11 月から 1 月の 3 ヶ月で 1000 羽から 2000 羽になり、その状況が 17 年も続いてきた。

日本野鳥の会茨城県は、国の研究機関と共同で、カモの糞を拾い、DNA 分析をした結果、いろいろな餌がある 11 月までカモはレンコンに興味を示さないが、真冬の餌不足の時、ハス田に来て、部位不明のハスを食べている。しかし、動画撮影をした結果、水面をなでるように餌を探し、レンコンが埋まっている深い泥の中に首を差し込んで餌を食べていないことが判明した。これらの調査と並行して、日本中のハス田を訪問し、収穫方法や栽培方法を学び、そのまとめを親団体である公益財団法人日本野鳥の会の機関誌で連載した。さらに、世界各地へ謂れのない罪で殺されるカモの実情を訴え、署名を集めた。集まった 15,927 名分の署名を茨城県議会に請願書とともに提出し、現在審議中である。審議結果を待たないうちに、県の役人が効果的な防鳥網とその正しい使い方の普及推進に進み始めている。